2/2004
IBMUSERS



# 日本で人気高いポピュラー小説が、どんどん英訳されて海外にデビュー

ムルハーン千栄子 イラスト◆安藤香子

## NYに和書英訳専門の出版社が誕生

文化発信の国際収支をみると、日本は大赤字だ。海外の本の邦訳はあふれているのに、日本書の外国語訳はその20分の1しかない。2002年から文化庁が現代日本文学の翻訳・出版事業（JLPP）を発足させた。まず発表した27作のリストから、米英仏独露の出版社に選ばせる方針で、実務にあたるのは外務省所管の国際文化交流推進協会という。注文待ち態勢らしいから、成果は気長に待つしかないとあきらめかけていたら、朗報が入った。

なんと、出版のメッカであるニューヨーク市で、初の和書英訳専門の出版社が旗揚げしたのだ。

Vertical,Inc.の酒井弘樹 社長は、日本経済新聞社の書籍編集者から日経BP社を経て、新しい理念の自社を起こした。2003年から今春にかけて、やつぎばやに18作も刊行している。

うれしいことに、今まで外国語訳では実績ゼロに近かったポピュラー小説ぞろいだ。日本ではエンターテインメント小説とよぶらしいが、popularとは、著者の意向やジャンルにかかわらず、「人気高く、よく売れて、広く愛される」という意味なので、源氏物語から『風と共に去りぬ』までポピュラー小説に入るのだ。外国人だって、いま多くの日本人を夢中にさせている作品を読みたいだろう。

## 鈴木光司、田口ランディ、江國香織、栗本薫といった作家のベストセラーを続々と刊行

まず、鈴木光司の『Ring』（原題『リング』）は、異例の話題作だ。映画のリメイク『ザ・リング』がハリウッドきっての実績をあげている。「ビデオを見たら7日後に死ぬ設定は、デジタル革命に消されゆくビデオという媒体へのelegiac wink（哀愁こめた別れの挨拶）」とか、英字紙にはメディア哲学的な評も載った。続編『Spiral』（『らせん』）はもっと怖い。亡霊女の呪いがさらに続く『ループ』の英訳も、待ちかねる人が増えそうだ。

いわば勝ち組メディアの代表は、《インターネットの女王》といわれるネット・コラムニストの田口ランディ。処女作『Outlet』（『コンセント』）は異色の心理的探偵小説で、犯人捜しのWhodunit（推理物）ではなく、兄の変死をライターの妹が探る、珍しいWhydunit（動機の追求型）である。

同じく女性作家の江國香織は、人物の設定がユニークだ。『Twinkle, Twinkle』（『きらきらひかる』）という題でも、童謡や童話にはほど遠い。主人公はアル中の女とゲイの男なのだ。セックスレスの関係が真の友情や愛や誠実さを生みだす擬似家族は、西欧のベストセラーにも多いモチーフだから、編集者や男性の興味をも惹きつけるにちがいない。江國香織が今春の直木賞を受賞した最新作『号泣の準備はできていた』も、翻訳が待たれる。

Vertical刊の作家11名のうち、女性はまだ3名ながら、栗本 薫がギネス級のスーパー長編『グイン・サーガ』で、4巻まで揃う堂々のスタートを切った。進行中の原作は92巻まで出ていて、英訳の先は長い。グインという豹頭のman-beastが、高貴な双子の孤児を助けて王国を奪い返すために宇宙を巡って闘うSF叙事詩に、ハマる人は多いはずだ。

**Dr.Chieko Mulhern**
比較文化学者。文学博士。青山学院大学在学中に渡米。NY市立大学英文科卒。コロンビア大学東洋文化学科で修士号と博士号を取得。コロンビア大学講師、プリンストン大学日本語課程主任を経て、イリノイ大学で比較文学の教授。現在は帰国して文筆活動中。日本での著書に『女と男の国境線』（中央公論社）、日本IBMの広報誌『無限大』の連載を収録した『おんな教授アメリカ33年』（文芸春秋）、『妻たちのホワイトハウス』（集英社）など。英文書に『Japanese Women Writers』（Greenwood Press）ほか。

**あんどう・きょうこ**
フリーランス・イラストレーター。東京都生まれ。日本出版美術家連盟理事。武蔵野美術短期大学油絵科卒業。資生堂化粧品パッケージ、雑誌、広告、書籍【『妻たちのホワイトハウス』（集英社）、『たたり』（双葉社）、『あなたの恋愛運は月の力で決まる』（実業之日本社）など】の表紙と本文イラストを制作。

世界的なファンタジー・ブームの中で、TV脚本家として知られる山田太一が山本周五郎賞をとった小説『Strangers』(『異人たちとの夏』)は、a thinking man's ghost storyと紹介してある。離婚した中年男が、12歳で孤児になった思い出の浅草を歩きまわるうち、悲劇的な死をとげた両親そっくりの夫婦と知り合う。会いにいくたびに、彼は痩せ衰えるのだ。他人事ならず哀しく、妙にリアルで、大人の男ならではの幻想といえる。

## 原文のテンポやニュアンスをうまく生かしたまま英文に

北方謙三の『Ashes』(『棒の哀しみ』)は、やはり救いのない男の現実をクールに描いて、日本ではハードボイルドと呼ばれるらしい。英文学のhard-boiledには欠かせない私立探偵ではなく、やくざの若頭が組員の権力争いの渦中で、空しい思いにさいなまれながらも、やるべき仕事をこなしていく。自己を殺し人間性を捨てて「棒のような男」になっても、組織の中で出世をめざさねばオトコがすたるし、弟分たちも浮かばれない。「燃え殻、亡きがら」を指す灰の複数形をあてた英題は、燃え尽き症候群でバーンアウトする道と知りつつ辿っていくしかない現代の会社人間、そして外国のビジネスマンも共感できる男の哀しみを、鮮やかにとらえている。

『Ashes』を原作とつきあわせてみて、いたく感嘆した。英訳はたいてい数稿を重ねるので、原文からずれていきがちだ。アメリカの編集者は、表現の欧米化、部分カット、説明的フレーズの追加まで提言したがる。一般読者にわかりやすく、という大義名分に屈した純文学の訳者たちは、くやしがっていた。私も学術書や英訳小説を出版するたびに、変更を元に戻させる理由を並べあげて、日本学の講義さながらの労力を費やしたものだ。

その点、Verticalの訳は、みごと原文にぴったり。北方スタイルのドライな文体は修飾句が少なく、動詞で語り、アクションで筋を運ぶなど、歯切れのいい英文と語感が似ている。だからこそ、日常用語に多い同義語のうちから、ニュアンスやムードや伏線にまで最適の一語を選びだすのが至難の技となる。訳者のみか、編集長の見識と力量がうかがえるところだ。

実は、イオアニス・メンザス編集長は、18歳まで日本育ち。プリンストン大学とコロンビア大学博士課程で、比較文学を専攻している。英訳の正確さと質の高さが納得できた。

世界でひっぱりだこの漫画は、独特の翻訳テクニックを要する。手塚治虫の『Buddha』(『ブッダ』)は、初巻から400頁とアメリカ人が好む大冊で、8巻のうち4巻まで出てきた。Visually spectacularと好評な上に、仏教に関心をもつ外国人も多いから、文化発信の国際貢献度は高い。

今春、Verticalはさらに新しい4人のポピュラー作家を、世界の文壇に送り出す。

高橋源一郎の『Sayonara, Gangsters』(『さようなら、ギャングたち』)は、ポップカルチャーの青春物で、東野圭吾の『Naoko』(『秘密』)は、広末涼子が主演した映画の原作だ。若者の生態や映像化の技術など、日本文学やシネマ学や文化人類学の授業で比較研究の教材に使える。

灰谷健次郎の『A Rabbit's Eyes』(『兎の眼』)は、元高校教師の著者の体験をふまえた学園物だ。全米各地に多い公立図書館に入れば、生徒たちが日本の同世代に興味を抱くきっかけになる。

佐々木 譲の『Zero Over Berlin』(『ベルリン飛行指令』)は、敵軍に畏怖された日本製の零型戦闘機のエンジニアたちが主役だ。在郷軍人や歴史マニアが喜んで資料に加えるだろう。

Verticalの英訳小説は、米国に支店をもつ大手書店のほか、Amazon.co.jpや、楽天ブックスや、bk1など、ネット書店を通して買える。手塚治虫の『Buddha』だけは、大手家電量販チェーン店の書籍部で販売中だ。

外国人への土産や餞別や贈り物に、年代や好みに応じて選りどり見どり。原作を読んでおけば、手紙やeメールやパーティで話がはずんで、花も実もある国際交流が長く楽しめますよ。